



TITLE:

<餘白録>向陵の牆垣

AUTHOR(S):

宮崎, 市定

---

CITATION:

宮崎, 市定. <餘白録>向陵の牆垣. 東洋史研究 1962, 21(3): 294-294

ISSUE DATE:

1962-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152617>

RIGHT:

策軍の小將を杖殺したが、天子から何故に奏上しなかつたかと問かれて問答したことを載せる。

對えて曰く、臣が職は當に杖すべくして奏するに當らず。

上曰く、誰か當に奏すべき者ぞ。對えて曰く、本軍當に奏すべし。若し街衢において死せば金吾・街使當に奏すべく、坊内に在りてならば左右の巡使當に奏すべし。

とあり、街使と巡使の別を述べ、その下の胡注に巡使を説明している。

按ずるに唐は監察御史十員、襄行五員あり、内外の糾察を掌り、分れて左右巡となり違失を糾察す。承天門朱雀街を以て（左右の）界と爲す。毎月一代し、將に晦ならんとすれば即ち刑部・大理・東西徒坊・金吾及び縣獄を巡る。

長安の街路について。平岡武夫「唐代の長安と洛陽」地圖篇序說二〇～二二頁參照。

### 〔餘白錄〕 向陵の牆垣

明治時代、東京の第一高等學校（向陵）の周圍の牆は神聖不可侵なものであつたそうだ。京都新聞、昭和三十八年一月六日付十五面の「インブリー事件の真相」に言う。當時（明治十九年頃）は一高が榮譽ある自治の宣言をした時で、その自治の學園をとりまく向陵の牆について、一高生が抱く感じはことに神聖なものだつた。それは學園を神聖なものとし、俗塵と聖境とを分つもの、それが向陵牆なのである。その傳統は、たとえば門限の午後十時に遅れた學生は、いかに近道であつても決してカキをまたぎ越えることはしない。長いカキを迂回して正門まできて、堂々と正門を飛び越えてはいることを誇りとしていた。そのカキを外來者、しかも外國人教師（アメリカ人、明治學院教師インブリー氏）がまたいではいつたのだから事が面倒になつたのは當然ともいえよう。この風潮は一高のみならず、當時の高校、中學校にも見られた云々。このようなことは未開民族によくある風習で、彼等はえてして、くだらないことに宗教的な意味をからませて、タブーを造りあげたがるものである。當時、京都の三高、すぐその隣の府立一中にも周圍に牆垣がめぐらされていたが、この牆垣は屢々その學校生徒によつて乗りこえられた。これが關東と關西の氣風の相違である。

〔宮崎〕